




論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

氏名	坂根 可奈子	
学位論文名	高齢者の自律的な服薬自己管理を査定する服薬アドヒアランス評価ツールの開発	
学位論文審査委員	主査	橋本 龍樹 
	副査	福岡 美紀 
	副査	津本 優子 

論文審査の結果の要旨

本研究は、在宅領域および急性期病院の看護師が、高齢者の自律的な服薬自己管理状況を査定するための服薬アドヒアランス評価ツールを開発することを目的として実施した。研究は、①高齢者の服薬アドヒアランス評価ツール開発における理論的枠組みの構築、②プレテストおよび専門家との意見交換による評価ツールの構成の検討、③信頼性、妥当性検証のための本調査、3段階のプロセスを経て実施した。インタビュー調査等から91コード6カテゴリの服薬アドヒアランス評価ツール原案を作成し、評価ツール開発における理論的枠組みを構築した。その後、プレテストと専門家との意見交換を実施して内容妥当性を高め、評価ツール修正版を作成した。さらに、全国の急性期病院、訪問看護ステーションの看護師を対象とした全国調査を実施し、747部の回答を得た。項目分析の結果、74項目から40項目を選定し、探索的因子分析から、40項目6下位因子の「高齢者の服薬アドヒアランス評価ツール」を作成した。評価ツールは信頼性、基準関連妥当性、構成概念妥当性を確保していることが示された。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

本研究は、高齢者が毎日服薬している内服薬を自己管理して自律的かつ継続して内服を維持できる能力を査定するツールを開発する研究である。「患者が治療方針の決定に賛同し積極的に治療を受ける」というアドヒアランスという患者も参加する新しい概念での服薬管理を確立させるために、大切なツールとなることが期待される。尺度は、高齢者の服薬自己管理の前提要件や服薬所作と生活の安定性など高齢者特有の生活機能を査定する項目や積極的な治療参画など服薬アドヒアランスの核となる項目などから成り立っており、高齢者の服薬アドヒアランスを査定する項目が網羅されている。インタビュー調査、プレテスト、評価ツールの作成、信頼性・妥当性の検証と所定の手順を踏まえており、妥当性が高いと評価できる。一方、在宅と急性期病院の両方の看護師が使うことを想定されているため、質問項目が多く、負担をかける可能性が懸念される。抽出された下位因子の特徴として対象者の健康レベルあるいは療養の場所によって使用する因子が異なる可能性や、在宅と急性期病院別の調査項目の設定や短縮版尺度の開発の必要性について言及されていた。今後は、在宅と急性期病院などそれぞれの医療現場で活用する場合、それぞれ現場に適した評価ツールの改定が望まれる。以上より、最終試験に合格したと判断される。